

Title	学術手話通訳における日本手話要素の表出に関する分析 : ろう通訳者と聴通訳者の比較から
Author(s)	中野, 聡子; 後藤, 睦; 原, 大介 他
Citation	大阪大学高等教育研究. 2018, 6, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/68154">https://doi.org/10.18910/68154</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 学術手話通訳における日本手話要素の表出に関する分析

— ろう通訳者と聴通訳者の比較から —

中野 聡子<sup>\*1</sup>・後藤 睦<sup>\*2\*3</sup>・原 大介<sup>\*4</sup>・細井 裕子<sup>\*1</sup>・川鶴 和子<sup>\*1</sup>・隅田 伸子<sup>\*1</sup>・  
金澤 貴之<sup>\*5</sup>・伊藤 愛里<sup>\*6</sup>・楠 敬太<sup>\*1</sup>・望月 直人<sup>\*1</sup>・諏訪 絵里子<sup>\*1</sup>・吉田 裕子<sup>\*1</sup>

## Analysis of the expression of Japanese Sign Language elements in academic sign language interpretation: A comparison of deaf and hearing interpreters

Satoko NAKANO<sup>\*1</sup>, Mutsumi GOTO<sup>\*2\*3</sup>, Daisuke HARA<sup>\*4</sup>, Yuko HOSOI<sup>\*1</sup>,  
Kazuko KAWATSURU<sup>\*1</sup>, Nobuko SUMIDA<sup>\*1</sup>, Takayuki KANAZAWA<sup>\*5</sup>, Airi ITO<sup>\*6</sup>,  
Keita KUSUNOKI<sup>\*1</sup>, Naoto MOCHIZUKI<sup>\*1</sup>, Eriko SUWA<sup>\*1</sup>, Yuko YOSHIDA<sup>\*1</sup>

本研究では、学術手話通訳には日本手話の要素が不可欠であるという前提のもと、実際の大学の授業映像を素材とし、日本語を起点言語 (SL)、日本手話を目標言語 (TL) とする翻訳表現について、日本手話母語話者のろう通訳者1名と地域で活動する聴者の手話通訳者10名で比較分析を行った。聴通訳者の翻訳表現は全体にわたってマウジングが伴っているため、日本手話の要素がろう通訳者に比して少なかった。例えば、非手指表現や手の動きの強弱が脱落しているために、アスペクトなどの時間の表現がなく、起点言語である日本語の文意を適切に表現できていなかったり、原語からの借用であることがあいまいであるといった特徴がみられた。また、話題の転換点について、ろう通訳者は、手話単語、ポーズ、うなずき、スライド資料の指さしと視線の誘導などによって示していたが、聴通訳者はこれらの表出があいまいであった。RS表現については題材中、ろう通訳者の訳出で3回表出されていたが、聴通訳者では全くみられなかった。

キーワード：日本手話、ろう通訳者、マウジング、アスペクト、CL (classifier),  
RS (Referential Shift), NM (non-manual)

In this study, we used video footage of actual university lectures as material to compare and analyze the translated expressions, from Japanese as the source language (SL) to sign language as the target language (TL), of one deaf interpreter (native speaker of Japanese sign language) and 10 hearing sign language interpreters active in the community. We worked on the premise that elements of Japanese sign language (JSL) are essential to academic sign language interpretation. The translated expressions of the hearing interpreters were accompanied by mouthing throughout the entire interpretation process, which resulted in fewer elements of JSL compared with the deaf

---

所 属：<sup>\*1</sup>大阪大学キャンパスライフ健康支援センター <sup>\*2</sup>大阪大学文学研究科 <sup>\*3</sup>日本学術振興会 特別研究員 (DC2)

<sup>\*4</sup>豊田工業大学工学部 <sup>\*5</sup>群馬大学教育学部 <sup>\*6</sup>大阪教育大学教育学研究科

Affiliation：<sup>\*1</sup>Health and Counselling Center, Osaka University

<sup>\*2</sup>Graduate School of Letters, Osaka University

<sup>\*3</sup>Research Fellowship for Young Scientists, Japan Society for the Promotion of Science

<sup>\*4</sup>Foreign Language Laboratory, Toyota Technological Institute

<sup>\*5</sup>Special Needs Education, Gunma University

<sup>\*6</sup>Graduate School of Education, Osaka Kyoiku University

連絡先：snakano@sccl.osaka-u.ac.jp (中野 聡子)

interpreter. For example, due to a lack of intensity in non-manual signals and hand gestures, the hearing interpreters' interpretations were characterized by a lack of aspect markers, an inability to properly express the meaning of sentences of the Japanese SL, and ambiguous use of borrowing from the SL. Furthermore, in regard to changes in topic, the deaf interpreter indicated changes by means including sign language words, pauses, nods, pointing to slide materials and guiding the line of sight. Meanwhile, the hearing interpreters expressed these changes more ambiguously. As for expressing RS (Referential shift), the deaf interpreter expressed shifts three times in the subject matter, whereas the hearing interpreters did not appear to express any RS.

Keywords : JSL (Japanese Sign Language), deaf interpreter, mouthing, aspect, CL (classifier), RS (Referential Shift), NM (non-manual)

## 1. 研究の背景と目的

### 1.1 日本の高等教育機関における手話通訳支援の現状と課題

平成28年4月、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」(障害者差別解消法)が施行されたことにより、今後、高等教育機関において手話通訳支援を合理的配慮として必要とする聴覚障害学生が増加すると予想される。授業における教員や学生の発話をリアルタイムで伝達する支援としては、手話通訳、手書きノートテイク及びPCテイクによる文字通訳がある。日本学生支援機構による「平成28年度(2016年度)障がいのある学生の修学支援に関する実態調査」<sup>(1)</sup>では、聴覚・言語障害学生が在籍する高等教育機関352校のうち337校がなんらかの授業支援を行っており、支援実施校のうち58校(17.2%)で手話通訳を提供している。しかし、手話通訳は大学内での養成が難しく、手話通訳を提供する大学では、部分的あるいは全面的に外部からの派遣に頼らざるをえない。上記、日本学生支援機構の調査で支援者の内訳が記されている平成26年度(2014年度)をみると、手話通訳の実施校59校のうち52校(88.1%)は外部からの派遣を利用している。このとき、手話通訳者として大学に派遣されるのは、大学所在地の地域で手話通訳活動を行っている者である。日本では、ろう者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するため<sup>(2)</sup>、厚生労働省の定めたカリキュラム<sup>(3)</sup>に従って、各自治体で手話通訳者養成事業を行っており、地域で活動する手話通訳者のほとんどはこの養成カリキュラムで学んだ者となっている。このカリキュラムには学術性の高い場面における手話通訳は含まれていない。高等教育機関で手話通訳者の養成が行われ、初等・中等教育から高等教育に至るまで統合教育の現場で手話通訳による支援が普及している諸外国(小林・白澤, 2013など)と事情が異なっ

ていることに留意する必要がある。

中野(2015)は、典型的な地方都市の手話通訳事情を反映しているといえる広島県の手話通訳者を対象に、高等教育の手話通訳に対するイメージを問うアンケート調査を実施している。回答結果から、高等教育の手話通訳に関心を持ちつつも、学術性の高い手話通訳について、どのように通訳スキルの勉強をすればよいかかわからない、事前準備をどうすればよいかかわからないといったとまどいと不安があることが示唆された。

もうひとつ、高等教育における手話通訳について、どのようなタイプの手話を用いるのが適切かという議論に関する問題がある。「聴覚障害学生のニーズに合わせて使い分けが必要」というのが建前であるが、実際、日本の多くの手話通訳者が用いている手話は音声日本語の要素が強い中間型手話<sup>(4)</sup>である(原・黒坂, 2011)。Mayberry(2006)は、L2の後期手話学習者は統語や形態論を必ずしも教わるわけではなく、L1の音声言語の語順で手話単語を表現するように指導を受けることもあると述べている。日本で行われている手話学習指導もこれに似た状況にあり、成人後L2として手話を学習し、手話通訳現場に派遣されている場合、日本手話の要素を多く含む訳出表現を行える者は少ない。このような背景もあり、「高等教育を受ける聴覚障害学生ならば日本語の力が高い」「専門用語が多出るので、日本語対応手話のほうがよい」といったレトリックで、音声日本語の要素が強い手話を使用することが正当化されている現状がある。

しかし、音声英語の発話に沿って手話単語を並べる手指英語を使用する聴覚障害学生であっても、手指英語よりアメリカ手話の通訳のほうが内容に対する理解度が高かったという研究報告がある(Murphy and Fleischer, 1977)。また、吉川他(2011)、石野他(2011)の報告によると、大学院生は学部生に比較して、手話言語特有の

文法であるCL (classifier), RS (Referential shift), NM (non-manual) 表現を用いた通訳に対する評価が高かった。手話言語特有の文法表現により、内容の論理構造を把握しやすいためであったと述べられている。手話言語には、複数形態素が同時に結合して語を形成したり、手指や顔・上体等の非手指が独立してそれぞれ異なった意味を表したりする重層性がある。日本手話の構造には、このような視覚-空間言語としてのわかりやすさが内在されているのではないかと考えられる。それゆえ、限定的条件や複数の因果関係を語る内容など、複雑な統語構造を必要とする通訳になるほど、日本手話の要素が不可欠になると考えられる。

このように、学術手話通訳の受け手のニーズと、養成を含めた日本の手話通訳をとりまく現状の間には大きな乖離がある。そのはざままで高等教育の手話通訳現場に立たなければならない手話通訳者のために、学術手話通訳に必要なスキルを効率的に身につけることのできるカリキュラムの開発が必要である。

## 1.2 大阪大学における学術手話通訳講座の開催

前項で述べたような学術手話通訳をめぐる諸事情に鑑み、大阪大学キャンパスライフ支援センター障がい学生支援ユニット（現キャンパスライフ健康支援センター相談支援部門）では、地域で活動する手話通訳者を対象として、2016年12月から2017年2月にかけて、「日本手話翻訳研究講座」を5回開催した。講座1回の所要時間は2時間とした。第1回から第4回までは、高等教育機関を卒業・修了した日本手話母語話者のろう通訳者<sup>(5)</sup>、第5回は聴者の日本手話通訳者を講師とした。開催の概要を表1に示す。

表1 学術手話通訳講座の開催概要

	講座開催日	講師	題材の授業	参加者数
第1回	2016年12月21日	ろう通訳者	環境エネルギー工学概論	3名
第2回	2017年1月21日	ろう通訳者	国語学入門	29名
第3回	2017年1月25日	ろう通訳者	民法入門	12名
第4回	2017年2月1日	ろう通訳者	経済現象を読み解く	11名
第5回	2017年2月9日	日本手話通訳者(聴者)	情報科学概論	8名

第1回から第4回までは、題材の授業の文字起こし文をもとにグループで訳出表現を話し合ったあと、参加者の中から数名が授業音声とスライド資料の再生に合わせて

て表出を行った。これに対し、ろう通訳者の講師がコメントをつけ、またモデル表現を示した。第5回は、講師も参加者もその場で授業音声聞いて訳出を行ったあと、両者の表現の違いについて話し合い、また講師から参加者の表現についてコメントをした。参加者へのアンケートでは、「参加者の表現について講評をもらうことで2回目の表現に反映できたため理解が深まった」、「具体的な表現方法について指導を受けることで自分の課題を見つけられた」など、同講座が有益なものであったことがうかがわれた。

中野他(2017b)は、2017年1月21日に開催した同講座の記録ビデオをもとに、講師のろう通訳者と参加者である聴通訳者の訳出表現の違いや、講師が参加者の訳出表現に対して言及した内容から、学術手話通訳として論旨を明確にし、正確に訳出するための要素について予備的検討を行っている。参加者の多くは、学術手話通訳としての資料の読み方など、事前準備のノウハウを身につけていないため、訳漏れや誤訳が多かった。さらに、原語借用であることを示す標識の有無や日本手話のリズムの保持、また、空間位置、意味に沿った手指の動き、文法的なNM表現の使用などの日本手話特有の表現において、講師のろう通訳者との間に明らかな違いがみられ、文意を適切に訳出することに影響を及ぼしていると推定された。

## 1.3 本研究の目的

先行研究での議論をふまえた上で、本研究では高等教育機関における講義のような、学術性の高い内容の手話通訳には、日本手話の要素が不可欠であるという前提にたつ。そこで、日本手話母語話者であるろう通訳者の手話表現を学術手話通訳者が目指すべき規範モデルと設定し、地域で活動する手話通訳者の訳出表現との間にどのような違いがみられるのか比較検討を行うことを目的とする。これにより、手話通訳者が身につけるべき言語知識や訳出スキルを明らかにすることで、将来的には、学術手話通訳養成カリキュラム開発につながる示唆を得たいと考えている。

## 2. 方法

### 2.1 対象者

①ろう通訳者X：女性。両親ろうの先天性ろう者で日本手話母語話者である。国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官として、多くの手話通



訳者を養成してきた。また、NPO法人手話教師センターにおいて、ろう通訳者の後進の指導にもあたっている。大学院修士課程を修了し、学術手話通訳特有のニーズを熟知している。

- ②聴こえる手話通訳者（以下、聴通訳者）A～Jの10名：聴通訳者のプロフィールを表2に示す。全員女性。すべての対象者が、居住地の都道府県認定手話通訳者<sup>(6)</sup>と手話通訳士<sup>(7)</sup>、両方の資格を有している。プロフィールには、手話通訳士資格を取得してからの経過年数を記載している。手話学習歴は、手話の学習を始めてからの経過年数である。全員、成人してからL2として手話の学習を始めた後期手話習得者である。各自治体で実施している手話通訳者養成事業の講習会受講の学習時間数のみで手話通訳の各種試験に合格することは難しく、どの対象者も地域の手話サークル、手話勉強会などの活動に参加して手話及び手話通訳スキルを実践的に身につけてきた背景をもつ。

表2 聴通訳者のプロフィール

手話通訳者	年齢	手話通訳士資格取得年数	手話学習歴	最終学歴
A	60代後半	29年	53年	高等学校
B	60代後半	11年	25年	大学
C	50代後半	10年	20年	短期大学
D	50代後半	9年	21年	短期大学
E	40代前半	15年	22年	大学
F	40代後半	7年	19年	短期大学
G	40代前半	6年	18年	高等学校
H	50代前半	5年	15年	短期大学
I	30代前半	2年	11年	大学院修士課程
J	40代前半	4年	7年	高等学校

なお、対象者には研究協力の打診をする際、研究の目的および収録の手続きの説明に加え、倫理的配慮及び個人情報取り扱いに十分な留意をする旨を述べた文書をメールで送付し、参加の意思表示を以て研究協力の同意したものとした。

## 2.2 題材

O大学で2014年4月10日に行われた共通教育「国語学」の授業映像を授業担当教員の許可を得て使用した。まず、90分の授業全体について文字起こしを行った。次に、学術手話通訳の利用者である聴覚障害大学教員が文字起こし文を読み、SLの日本語の文意を適切に伝えるには、TLとしての手話の訳出に日本手話の要素を多く必要とする想定される3箇所【1】【2】【3】（文末資

料を参照）を選んで題材とした。1箇所は、1分20秒～1分45秒の長さとなっている。【2】のみ関西地方のさまざまな方言と、それらをどのくらい知っているか受講生が記入する欄を設けたプリント用紙がスライド資料として掲示されていた。

## 2.3 手続き

ろう通訳者Xが手話表出できるように、授業音声の再生に合わせて、文字が提示されるプロンプト動画を作成した。要約筆記ソフトIPTalkの前ロール機能を利用して、文字化した原稿を用意した。IPTalkの字幕提示用として用意したパソコンで、授業音声を再生させながら字幕を提示し、動画キャプチャーソフト、Bandicam（Bandicam Company製）で字幕提示映像をキャプチャーして、プロンプト動画とした。

収録日の1週間以上前に対象者に題材の授業90分すべての文字起こし文に、訳出を行う【1】【2】【3】の部分がわかるようにして、メールの添付ファイルで送付した。聴通訳者A～Jの収録は、2017年7月31日～2017年8月18日の間で、大阪大学キャンパスライフ健康支援センターにて行った。収録は1人あたり、30分～50分を要した。最初に、当該授業の講師映像を1分程度見てもらい、授業の雰囲気や講師の話し方の特徴をつかめるようにした。次に、【1】の講義音声を再生して談話全体を聞けるようにした。再生は2回まで可とした。その後、翻訳の訳出を行い、その様子をデジタルビデオカメラ（HDR-GWP88, SONY製）で撮影した。ろう者がデジタルビデオカメラのそばに立ち、あいづちを入れながら手話を見ることで、通訳者が自然な手話表出を行えるようにした。収録のやり直しは1箇所につき2回まで可とした。この作業を訳出部分【1】【2】【3】について繰り返した。また、スライド資料が使用されていた訳出部分【2】についてのみ、収録前にスライド資料も見てもらい、収録時は通訳者の右もしくは左にスライドが投影されているという設定で訳出を行ってもらった。

ろう通訳者Xについては、聴通訳者に送付したものと同一文字起こし文に加え、プロンプト動画、講義の映像データを送付し、ろう通訳者Xの職場で撮影を行った。ろう通訳者の正面の位置においたモニターでプロンプト動画を再生させること以外は聴通訳者と同じ条件で、訳出表現をビデオカメラで記録した。

## 2.4 データの処理

本研究で訳出部分とした【1】【2】【3】の3箇所は、1.3

で述べた本学開催の日本手話翻訳研究講座のうち、ろう通訳者Xを講師として行った2017年1月21日の回でも扱った部分である。そこで、中野他(2017)の結果に基づき、「原語借用」44箇所、「話題の転換点」18箇所、および「日本手話の文法要素」のうち、「CL表現を含む文」7箇所、「RS表現を含む文」3箇所、「アスペクト(進行・継続)」11箇所、「否定の表現」9箇所を取り上げ、表3に示す点に注目して、手話表出の構造を記述した。分析対象箇所は、本文末の資料に、ローマ数字と算用数字で通し番号をつけ、下線で示している。

なお、分析にあたっては、マックスプランク心理言語学研究所が開発したアノテーションソフト、ELAN (EUDICO Linguistic Annotator) を使用した。

表3 分析内容と手話表出の構造の記述事項

分析対象	記述事項
原語借用	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意味的なまとまりの保持</li> <li>・脱落の有無</li> <li>・マウジングに付随している要素(手話単語・指文字・NMなど)</li> </ul>
話題の転換点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・話題の転換点の表出法(手話単語・ポーズ・NMなど)</li> </ul>
CL表現を含む文	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文の意味に合ったCLの表出(手の形・手の動き・サイズなど)</li> <li>・NMの有無やその特徴</li> <li>・文の意味に合った空間の使用</li> </ul>
日本手話の文法要素の表出	<ul style="list-style-type: none"> <li>RS表現を含む文                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・RS表現の有無</li> </ul> </li> <li>アスペクト(進行・継続)                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・手話動詞の動きの変化の有無</li> <li>・アスペクトを表すNM表現の有無やその特徴</li> </ul> </li> <li>否定の表現                             <ul style="list-style-type: none"> <li>・否定の手指表現の方法</li> <li>・否定を表すNMの有無やその特徴</li> </ul> </li> </ul>

### 3. 結果

ろう通訳者Xと聴通訳者A～Jの手話表現にはいくつかの特徴的な相違がみられた。以下、詳細について検討してゆく。

#### 3.1 原語借用

本研究の題材は、日本語の動詞の否定に関する歴史的変化や方言に関するトピックスが含まれている。そこで、SLの日本語の借用が不可欠と考えられる専門用語や方言44語について、ろう通訳者と聴通訳者の訳出表

現を比較した。双方に共通していたのは借用手段の1つである、SLの音声発話時の口型を表出するマウジングを伴っていたことである。

マウジングは、原則として手指で表現される語と同時に生起するが<sup>(8)</sup>、本研究の訳出表現では、ろう通訳者・聴通訳者どちらにも、(1a)口型と手話単語のみ、(1b)口型と指文字のみ、(1c)口型と手話単語・指文字の組み合わせ、(1d)口型のみ、の4つのパターンがみられた。

以下に具体例をあげる。ここでは、コロン(:)の左側に起点となる日本語の語句を、右側に訳出された手話表現を示す。日本語の語句の最初につけられた数字<sup>(1-24)</sup>などは、本文末につけた講義の文字起こし文における出現箇所に対応している。手話の構成要素については、以下のように示す。まず表出された要素については、その意味に近い日本語を{ }内に、左から右へ表出順に示す。指文字で表された要素については、{ }をつけず、表現された音価をカタカナで表記した。マウジングについては、コロンの左側にマウジングであることを示す「M」、右側に表出された口型の音価をカタカナで表記し、手指表現と同時にマウジングが生じた部分を下線で示している。また、該当の訳出を行った通訳者を[ ]内に記す。

- (1) a. <sup>[1-24]</sup>ほんま：本当 [H]  
M: ホンマ
- b. <sup>[1-37]</sup>こいさん：コイサン [A]  
M: コイサン
- c. <sup>[1-32]</sup>受けへん：受ける へん [F]  
M: ウケヘン
- d. <sup>[1-28]</sup>そういうこっちゃ：(手指表出なし) [C]  
M: ソウイウコッチャ

ろう通訳者の原語借用の特徴として、借用であることを示すスピードを抑えた手の動きやNM表現を伴い、また、マウジング及び同時に生起する手指表現の両方において意味的なまとまりが保持されていることが挙げられる。

これに対し、聴通訳者は分析対象とした専門用語や方言以外の部分も、ろう通訳者に比してマウジングを多く用いる傾向にあり、ろう通訳者のような、借用であることを示す手の動きの強弱やNM表現が明瞭に表出されることは少なかった。また、借用語の表現において、日本手話のリズムが失われる、借用語の一部が脱落する、SLの日本語と異なるマウジングで表出する、といった特徴がみられた。

### 3.1.1 日本手話のリズムの保持と表出

日本語を借用して手話に訳出する場合、語を構成するひとつのユニットの意味的なまとまりを保持することが求められる。しかし、聴通訳者の訳出では、SLの発話リズムに影響を受けた結果、TLとしての手指の動きやマウジングのリズムが失われるという特徴があった。中野他(2015)は手話通訳における複合語の訳出で、手話通訳者らに同様の現象がみられたことを報告している。

(2)は、複合語「方言周圏論」の構成要素の手話表現を音声の発話リズムに合わせて反復したため、日本手話のリズムが失われている例である。

(2) <sup>[1-44]</sup> 方言周圏論:

地方 言葉 言葉 輪が広がる ロン [H]  
M:ホオ- ゲン シュウケン ロン

(3)は、指文字あるいは手話単語とマウジングの両方で、SLの音節の区切りを強調するような表出となっているため、1つの語としてのまとまりが保持されていない例である。

(3) a. <sup>[1-9]</sup> 形容詞: ケイ ヨウ ウ 言葉 [G]  
M:ケイ ヨウ ウ シ

b. <sup>[1-25]</sup> えげつない: エ ゲ ツ ナイ [I]  
M:エ ゲ ツ ナイ

### 3.1.2 借用表現における脱落

聴通訳者においては、借用語を表出する際、SLで示されている学術的内容の概念や意味が適切に伝わらなくなるような脱落が観察された。(4)は、SLの「連体形」を原語借用として表出する際、「形」を省いて「連体」と表現している例である。脱落部分を↓をつけて( )内に示す。

(4) <sup>[1-5]</sup> 連体形: 連体 (↓形) [C]  
M:レンタイ

同様の脱落はCの他、Bにもみられた。【1】の講義音声では、「連体形」の他「終止形」が繰り返し出現しているが、ろう通訳者の訳出表現ではこれらの複合語の構成要素の脱落は一切みられなかった。中野他(2015)は、SLを日本語、TLを日本手話とする同時通訳における複合語の訳出表現について、指導者レベルと一般レベルの通訳者の比較を行っている。指導者レベル群では、短い複合語は一貫して同じ表現方法を取り、長い複合語は回を重ねるにつれて一部が脱落する傾向がみられたと述べ

ている。そして、このような場合は、意図的な省略とみるべきではないかとしている。このような観点から考えると、(4)は意図的な省略とはみなしがたい。

### 3.1.3 不適切な言い換え

聴通訳者では、原語借用におけるマウジングにおいて、SLの学術の意味や表現が適切に伝わらない不適切な言い換えとなっているものが観察された。(5a)は、「古文」を表現する際、マウジングでは「古い文法」と置き換わっている。また、(5b)は、手話単語、マウジングともに、「古文」を「昔」と置き換えている。

(5) a. <sup>[1-11]</sup> 古文: 古い 昔々 文 [A]  
M:フルイ プンボウ

b. <sup>[1-11]</sup> 古文: 昔 [C]  
M:ムカシ

これらは意識ともとれるが、本題材は大学の授業であり、通訳の受け手は大学生が想定されている。従ってレジスター(言語使用域)が保持されていない不適切な言い換えと考えられる。ろう通訳者の訳出表現では専門用語等において、こうした言い換えは一切みられず、SLの原語借用が一貫して行われていた。

### 3.2 話題の転換点

講義の流れや論旨展開をつかむうえでは、話題の転換点が明確に示される必要がある。訳出部分【2】は、スライド資料に沿って、次々と関西地方の方言に言及される談話内容である。このなかで、話題の転換点となる18箇所について、ろう通訳者と聴通訳者の表現を観察した。

ろう通訳者は、手話単語、ポーズ、うなずき、スライド資料の指さしと視線の誘導、あるいはこれらの組み合わせによって、話題の転換点であることを示していた。以下、話題の転換点にあたる表出を四角で囲って示し、その前後を含めて記述する。■はうなずきを示している。PTは指さしを表し、ハイフンで指さしの指示物や指示空間を記述している。(6a)は、ろう通訳者の訳出例であり、うなずきと手話単語を用いて話題の転換点を示している。(6b)は、うなずきに加えて、スライドの指さしにより、話題の転換点を示している。ろう通訳者はスライドの指さしをすると同時に、通訳者自身がスライドに視線を移す(図1参照)動作が伴っていることで、通訳の受け手の視線をスライドに誘導されやすくしている。聴通訳者は、ろう通訳者に比べてスライドの指さし



が少ないだけでなく、顔を正面に向けたまま指さしのみ素早い動きで表出されることが多かった。このため、話題の転換点が不明瞭となっていた。

- (6) a. <sup>[II-1]</sup> {敬語} ハル PT-3 ■ {話が変わって} ■  
M: ケイゴ
- {本当} [X]  
M: ホンマ
- b. <sup>[II-9]</sup> {早い} {行く} トカ ■ PT-スライド ■  
M: ハヨ イコ
- {買う} {お願い} [X]  
コオテ キテ

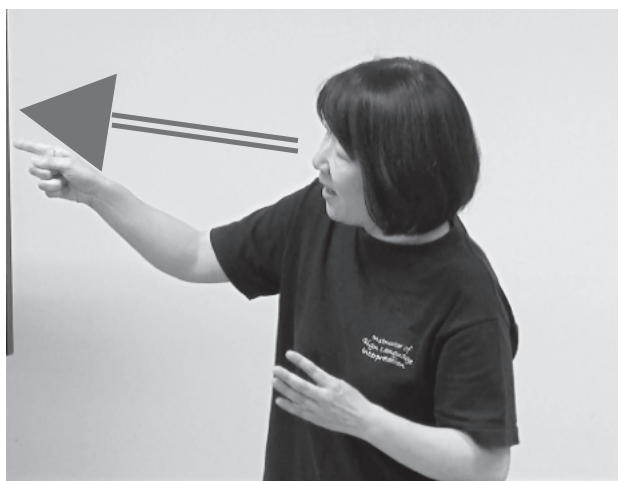


図1 自身もスライドを見る「視線の誘導」

(7) は、話題の転換点の標識となるものが全く入っていない聴通訳者の表出の例である。「まむし井」の説明と次の話題の「めばちこ」がつながり、「(鰻を) まぶすめばちこ」と表出されている。

- (7) <sup>[II-17]</sup> マムシというのは…: マムシ <sup>NM: 疑問</sup> {知る} PT-2  
M: マムシ M: シツテル
- マブス {から} {目} メバチコ [B]  
M: マブス カラ メバチコ

聴通訳者が話題の転換の表出を行っている場合もあるが、それはうなずきやポーズ、{次}、{話が変わって}といったような手話単語にとどまっている。さらに、借用を示すNM表現は表出されておらず、また、スライドの指さしと同様に、原語借用の部分が素早い動きで表出されているために、話題の転換点を示す標識が不明瞭になっていることが多かった。

### 3.3 日本手話の文法要素の表出

#### 3.3.1 CL表現を含む文

手話言語のCL (Classifier) は、ものの動きや位置、形や大きさなどを手の動きや位置、形に置き換えるものである (木村・市田, 2014)。CLはジェスチャー的・図像的な性質と、文法に関わる性質の両方を併せ持つ (松岡, 2015)。CL構文では、CL手型と運動形態素 (CL手型の動き)、手話空間内の位置形態素 (CL手型の位置) の各要素が結びついて意味を有しており、1つの音節が複数の形態素から構成されている一音節多形態素構造となっている (Emmorey, 2003 および 市田, 2005b)。

ろう通訳者Xの表出のなかで、CL表現の特徴的な表出がみられた7箇所について聴通訳者の表出と比較した。

ろう通訳者Xの場合は文脈的な意味および文法上の必要性に合わせて空間の位置を設定し、使い分けている。これに対し、聴通訳者は、空間を使い分けることが少なく、標識を持たない空間 (ニュートラルスペース) を用いることが多かった。聴通訳者は、特定の空間位置が割り当てられたとしても、それがひとつのエピソードのなかで一貫して用いられていない、CL手型の動き (運動形態素) と割り当てられた空間位置が一致していないといった表出により、文意に沿った適切な表現となっていないことが多かった。(8a) に聴通訳者、(8b) にろう通訳者の例を示す。文脈上の意味づけとして割り当てられた特定の空間について、ここでは、(i)、(j)、(k) で示した。{変わる} のように、手活動詞や指文字の前後に空間位置が表記されているものは、前側が手指の動きの起点、後側が終点となっている。CL表現については、「CL^」のあとに表現の意味的内容を記している。

(8a) は、中世までの変化はニュートラルスペースで表出し、現代以降については空間 (i) と空間 (j) を割り当てている例である。ただし、この表現では、話者は否定で用いられる連体形が中世から現代にかけて「ぬ」から「ん」に変化することを意図しているにもかかわらず、この通訳者の表出では現代になってから「ぬ」から「ん」に変化するという意味になっており、文意を適切に表していないと言える。これに対して (8b) のろう通訳者Xは、古代を前方左側の空間 (i)、中世を身体の正面の空間 (j)、現代を前方右側の空間 (k) に割り当て、これらを一貫して用いることで、通訳の受け手に文意を適切かつわかりやすく伝えていると考えられる。また、ろう通訳者Xは、中世から現代にかけて、「ぬ」が「ん」に変化する現象について、指文字「ヌ」を、空間



(j) から空間 (k) へ手型を保持したまま移動させ (図2参照), 空間 (k) の位置で指文字「ン」を表出している。

聴通訳者の手話表現において, 中野他 (2016) で報告されたように, CLの構成要素のうち, 指示する物体の形を反映しておらず, 表出として適確ではないCL手型の表出はなかったものの, ろう通訳者Xの表出のように指文字に運動形態素を付加して, CL構文とするような表現はみられなかった。

(8) a. <sup>[III-2]</sup> 古文でね… : 古文 ■ 昔 ■ ズヌ  
M: コブン ムカーシ ストヌガ  
ある ■ 中世 ヌ 変わる ■ 現在 ヌ  
アツテ チュウセイヌニ カワツテ イマヌ  
変わる ン なる [G]  
MG: 「バ」 M: ン ニナツタ

b. <sup>[III-2]</sup> 古文でね… : 古文 ■ PT-i ズ ヌ ■  
M: コブン M: スM: ス  
ヌ ある PT-jiji ■ 昔 中世 場合  
M: ス アル M: チュウセイノ バアイハ  
ヌ ■ CL^j ヌ k ■ 現在 ン ■ [X]  
M: ス M: イマ ン



図2 指文字「ヌ」に運動形態素を付加することによって事象の変化を表している例

### 3.3.2 RS表現を含む文

RS (Referential Shift) は, 語彙的・空間的手段により, 視点の変化を表す文法的装置である (Emmorey, 2002). 引用された発話の話者や描写された行動の関与者の表情や身ぶりを再現し (市田, 2005c), ネイティブサイナーは目線の変化や頭の動きなどで, どこからどこ

までがRSなのか判断している (松岡, 2015).

(9) にろう通訳者Xの訳出表現を記す. RS表現については, 「RS^」という表記に続いて表出の意味的内容とを記し, 【 】でくくっている. また, NM表現については手指表現の表記の上部にNM表現が同時に生じている部分を下線で示し, その内容を記している。

ろう通訳者Xは, 題材の中でRSを含む表出が3回観察された. (9a) は, 「文献をたどっていくと…」に続けて, 語り手自身の心情を表出する視点に切り替わり, 気づきがRSとして挿入された後, 再び「西日本の方言に…」で語りの視点に戻っている. (9b) も同じく, 「そういうふうを考えていきますとね」の後に, 「ああ, なるほどね」というような納得のうなずきのNMがRSとして挿入されている. (9c) では, 東北と九州沖縄という遠く離れた地点の方言が同じ, もしくは似ていることへの気づきや発見, 納得の心情がRSとして挿入されている。

(9) a. <sup>[IV-1]</sup> 文献で… : 本 読む CL^たどっていく

RS^ 【「ああ」という納得のうなずき】 何

わかる 言う ■ 西 日本 方言 ある  
M: ワカル イエバ ニシニホン ホウゲン アル

わかる [X]  
ワカル

b. <sup>[IV-2]</sup> そういう風に… : PT-スライド ■ みた

い 考える RS^ 【なるほど 納得のNM】

言葉 CL^広まる 言う [X]  
M: コトバ ヒロマル イッタラ

c. <sup>[IV-3]</sup> 一見地理的には… : 日本 場合 CL^東西  
M: ニホン バアイ

—————NM: 順接  
 南北に長い日本 だから PT3-1・3-2 RS^ 【「ん

』という気づきのNM】 東北 九州沖縄  
M: トウホク キュウシュウオキナワ

CL^少しずつ波及 PT3-1・3-2 RS^ 【「あ!」と

いう納得のうなずき】 同じ 似る  
M: オナジ ニテイル

—————NM: 強調—————NM: 強調  
 PT3-1・3-2 ある [X]  
M: アル

これに対し、聴通訳者は題材全体にわたってRSの表出は全くみられず、語りの立場という単一の視点のみで訳出されていた。

### 3.3.3 アスペクト

日本手話において文法的アスペクト (grammatical aspect) は、形態素の追加、手話動詞の動き自体の変化や、NM表現によって、動詞が表す行為の様態 (行為が完了しているかどうか、進行中かどうか、行為が開始したかどうかなど) を表す (松岡, 2015)。題材中、進行・継続のアスペクトを含む11箇所の表出について、ろう通訳者と聴通訳者の表現を観察した。

本研究におけるアスペクトの分析対象語は、いずれも何世紀にも渡る長大な時間の流れにおける変化を表している。ろう通訳者Xは、「広がる」「流れる」「続く」などの動詞をスピードを抑えた手の動きで表出することによって、長い期間における変化であることを表現する進行・継続のアスペクトを表していた。これに加えて、アスペクトを表すNM表現として、必ず口を引き結ぶNM表現も生起していた (図3参照)。



図3 口を引き結ぶNM表現によるアスペクトの表示

これに対し、聴通訳者の手話動詞の手指表現は、動きにアスペクトを示すための変化がほとんどみられず、文意を適切に表すアスペクトが表示されていなかった。また、手指表現には、日本手話特有の口型であるマウジング・ジェスチャーが伴っている場合もあったが、「パ」「ピ」「バ」「ポン」など、これらは比較的短い時間内での変化を表す口型であり、文意に沿っていない不適切な

ものであった。(10) に例を示す。マウジング・ジェスチャーをMGとし、その口型をコロン (:) の右側に記述する。

- (10) a. <sup>[V-5]</sup> 広がっていく : CL<sup>^</sup> 広がっていく [A]  
MG: ビ ビ ビ
- b. <sup>[V-9]</sup> 広がっていく : CL<sup>^</sup> 広がっていく [E]  
MG: パ パ パ

SLの日本語では時間の変化の長短にかかわらず、「広がっていく」という表現を用いる。それに対して、図像性の高い手話言語では、時間的な変化の長短や現象の生じ方で表現が異なってくる。訳出には文意を適切に捉えて表出することがポイントとなるであろう。

また、聴通訳者において、アスペクトを表すNMが表出されない理由のひとつに、マウジングがあげられる。ろう通訳者はアスペクトを表すNMの表出が優先されるが、聴通訳者では手指表現にマウジングが伴うことでアスペクトを表すNMが表出されないことがあった。また手指表現も音声の発話リズムに合わせて表出されるため、手の動きとしてもアスペクトが表示されなくなっていた。(11) にその例を示す。

- (11) a. <sup>[V-1]</sup> 続いている : 続く [B]  
M: ツツイテイル
- b. <sup>[V-6]</sup> 流れていく : CL<sup>^</sup> 流れていく [D]  
M: ナガレル

### 3.3.4 否定の表現

日本手話においてNMは、さまざまな文法的要素を有しているが、ここでは特に、ろう通訳者と聴通訳者の否定の表現におけるNMの表出について観察した。日本手話の否定表現には左右の首ふりや、頭を前に突き出したり後ろにひいたりするようなNM表現が伴う (松岡, 2015)。本研究において否定の表現に関わる分析対象語とした9語は、いずれも関西地方の方言であるため、原語借用も不可欠である。ろう通訳者Xは、(12) に示すように、マウジングで原語借用を行いつつ、否定を表す手話単語「ない」と同時に首ふりのNM表現を表出している。これに対し、聴通訳者は(13)のように、否定の部分にうなずきのNM表現が生起されることが多かった。「ん」「せぬ」「へん」といった関西地方の方言の否定表現を強調しようとしてうなずきのNM表現を挿入した可能性も考えられるが、うなずきのNM表現は肯定の意味にもとれる。このため、手指表現では否定、NM表現では肯定という語の意味が正反対の乖離した表出と





- Gile, D. (2009) *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Amsterdam/Philadelphia : John Benjamins. 田辺希久子, 中村昌弘, 松縄順子 翻訳『通訳翻訳訓練 基本的概念とモデル』, みすず書房, 2012.
- 原大介・黒坂美智代 (2011) 日本における中間型手話はハイブリッド手話なのか, 電子情報通信学会技術研究報告, WIT, 福祉情報工学, 110 (418), 31-35.
- Hilger, A. I. Loucks, T., Quinto-Pozos, D., & Dye, M. (2015) Second language acquisition across modalities: Production variability in adult L2 learners of American Sign Language, *Second Language Research*, 31(3), 375-388.
- 市田泰弘 (2005a) 手話の言語学 (2) 図像性をめぐる2つの世界—手話の音韻形態構造 (1) 「CL構文」, 『月刊言語』第34巻 第2号, 94-100, 大修館書店
- 市田泰弘 (2005b) 手話の言語学 (5) 時間・空間と手の運動—日本手話の文法 (1) 「アスペクト」ほか, 『月刊言語』第34巻 第5号, 92-99, 大修館書店
- 市田泰弘 (2005c) 手話の言語学 (7) 話し手の身体と視線—日本手話の文法 (3) 「動詞の一致 (再考) と指示対象のシフト」, 『月刊言語』第34巻 第11号, 88-96, 大修館書店
- 石野麻衣子・吉川あゆみ・松崎丈・白澤麻弓・中島亜紀子・蓮池通子・中野聡子・岡田孝和・太田晴康 (2011) 学術的内容の高度専門化に伴う聴覚障害者の手話通訳に対するニーズの変化, 日本特殊教育学会第48回大会予稿集, 電子版.
- 木村晴美・市田泰弘 (2014) 『はじめての手話 初歩からやさしく学べる手話の本』 (改訂新版), 生活書院.
- 小林洋子・白澤麻弓 (2013) 米国の高等教育機関における手話通訳養成動向, 筑波技術大学テクノレポート, 21, 97-102.
- 松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』, くろしお出版.
- Mayberry, R. I. (2006) Second language learning of sign languages. In K. Brown (Ed.), *Encyclopedia of Language and Linguistics*, 2, 743-746, Oxford, England: Elsevier.
- McIntire, M. L., & Reilly, J. S. (1988) Nonmanual behaviors in L1 and L2 learners of American sign language, *Sign Language Studies*, 61, 351-75.
- McKee, R., & McKee, D. (1992) What's so hard about learning ASL? Student's and teachers' perceptions, *Sign Language Studies*, 21(75), 129-58.
- Murphy, H.J. & Fleischer, L.R. (1977) The effects of Ameslan versus Siglish upon test scores. *Journal of Rehabilitation of the Deaf*, 11, 15-18.
- 中野聡子 (2015) 広島県の学術手話通訳養成に関する実践的研究, 広島大学アクセシビリティセンター研究報告書「教育アクセシビリティ研究」, 3-11.
- 中野聡子・菊澤律子・市田泰弘・飯泉菜穂子・岡森裕子・金澤貴之・原大介 (2015) 手話通訳における複合語の訳出—通訳スキルの違いにおける比較—通訳翻訳研究, 15, 17-34.
- 中野聡子・原大介・金澤貴之・川口聖・川鶴和子・伊藤愛里・楠敬太・望月直人 (2016) ろう通訳の訳出表現に関する予備的検討—一国語の授業における聴覚特別支援学校教員の手話表現との比較—, 日本特殊教育学会第54回大会発表論文集, 電子版.
- 中野聡子 (2017a) 手話で学ぶことの心理学的意味とは, 齊藤くみ編著『手話による教養大学の挑戦—ろう者が教え, ろう者が学ぶ—』, 第6章, 187-209. ミネルヴァ書房.
- 中野聡子・原大介・金澤貴之・川鶴和子・細井裕子・望月直人・楠敬太・伊藤愛里 (2017b) 学術手話通訳に求められる訳出スキルに関する予備的検討—ろう通訳者を講師とした日本手話翻訳研究講座の記録から—, 日本特殊教育学会第55回大会発表論文集, 電子版.
- 岡典栄・赤堀仁美 (2011) 『文法が基礎からわかる 日本手話のしくみ』, 大修館書店.
- Taub, S., Galvan, D., Piñar, P., & Mather, S. (2008) Gesture and ASL L2 acquisition. In R. M. Quadros (Ed.), *Sign languages: Spinning and unraveling the past, present and future. TISLR9*. Forty five papers and three posters from the 9th Theoretical Issues in Sign Language Research Conference, Florianopolis, Brazil, December 2006. Petrópolis, Brazil: Editora Arara Azul.
- 吉川あゆみ・石野麻衣子・松崎丈・白澤麻弓・中野聡子・岡田孝和・太田晴康 (2011) 高等教育における手話通訳の活用に関する研究—学術的内容の高度化に対応するための手話通訳の技術的ニーズに着目して—, 日本社会福祉学会第59回秋季大会, 461-462.
- Wilcox, S., & Wilcox, P. (1991) *Learning to see: ASL as a second language*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Woll, B. (2013) Second Language Acquisition of Sign Language, *The Encyclopedia of Applied Linguistics*.

## 注釈

- (1) 日本学生支援機構では, 平成17年度から年1回, 全国の大学を対象として, 障がいのある学生の修学支援に関する実態調査を行っている。  
[http://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu\\_shien/chosa\\_kenkyu/chosa/index.html](http://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/index.html) (2017.10.1確認)
- (2) 「地域生活支援事業における意思疎通支援を行う者の派遣等について」(平成25年3月27日 障企自発0327第1号)
- (3) 「手話奉仕員及び手話通訳者の養成カリキュラム等について」(平成10年7月24日 障企第63号)
- (4) 日本で用いられている手話は, ①日本語とは全く異なる文法体系をもつ自然言語である日本手話, ②日本語の文法に合わせて手話単語を並べ, 助詞や助動詞は指文字や口形で表す日本語対応手話, ③2つの手話の文法的要素が混合した中間型手話, に分類されている(中野, 2017a)。大部分の手話通訳者や聴者が用いているのは中間型手話であるが, 単語レベルで日本手話の借用はあっても語順やリズム等の統語レベルでは日本語対応手話の要素が強い(原・黒坂, 2011)。



- (5) 聴通訳者では、手話通訳を通して、ろう者と聴者の間に存在する言語的・文化的ギャップを解消するのが容易でないことがある。この点において、手話言語を母語とし、ろう文化・ろうコミュニティに生きるろう通訳者はアドバンテージがある。世界手話通訳者協会（WASLI）は、ろう者も通訳トレーニングを受け、通訳の仕事に従事することを支持している。ろう通訳の主な通訳活動場面は、フィーダー（音声発話を中継ぎの手話として表出する聴通訳者）を通じた手話通訳、盲ろう者向けの通訳、ミラー通訳、ろう者と聴者のコミュニケーション仲介などである。日本では、公的な資格認定基準が未成立である。NPO法人手話教師センターが、日本手話を母語とし、書記日本語の読み書きが可能であるろう者を対象として、ろう通訳者の養成を行っている。
- (6) 社会福祉法人全国手話研修センターが管轄する「手話通訳者全国統一試験」、もしくは都道府県で独自に実施する試験に合格した者を、都道府県認定手話通訳者として認定・登録している。これらの試験の受験には、手話通訳者養成課程の修了など一定の条件を満たす必要がある。
- (7) 「手話通訳を行う者の知識及び技能の審査・証明事業の認定に関する省令（平成二十一年三月三十一日厚生労働省令第九十六号）」に基づく公的資格である。「社会福祉法人聴力障害者情報文化センター」が厚生労働大臣の認定を受け、手話通訳技能認定試験を実施し、資格認定・登録を行っている。
- (8) Sign Language Linguistics Net [手話文法研究室]  
<http://slling.net/resources/glossary.htm> (2017.10.1確認)

資料 「国語学」

I-1~44	: 原語借用
II-1~18	: 話題の転換点
III-1~7	: CL表現を含む文
IV-1~3	: RS表現を含む文
V-1~11	: アスペクト (進行・継続)
VI-1~9	: 否定の表現

[1]

これが西日本ではどうなっているかという<sup>[I-1][VI-1]</sup>「読まん」<sup>[I-2][VI-2]</sup>「書かん」<sup>[I-3][VI-3]</sup>「知らん」, 「ん」になりますね。「ん」っていうのは、これは結局もとは「ぬ」です。「ぬ」っていうのは何かっていうと<sup>[I-4][III-1]</sup>古典文法覚えている人は打消しの「ず」というのがあってですね。「ず」の<sup>[I-5]</sup>連体形の「ぬ」というのがありますね。その「ぬ」が「ん」になっているわけです。なぜ<sup>[I-6]</sup>連体形なのかというのもこれも面白いところですけれども中世にそれまで<sup>[I-7]</sup>終止形と<sup>[I-8]</sup>連体形とあったのが終止形がもう使われなくなって連体形で文を終止するようになったっていうね。そういう現象があるんです。これは「ぬ」「ず」だけではありません。<sup>[I-9]</sup>形容詞もそうですし<sup>[I-10]</sup>動詞もそうなんです。その辺のことも詳しくみていきますけども、その影響・だから<sup>[I-11][III-2]</sup>古文でね、ずっと「ず」と「ぬ」があつてね、それが<sup>[I-12]</sup>中世になって「ぬ」になって、今日「ぬ」が「ん」になっている。という意味ではずっと歴史は<sup>[V-1]</sup>続いているわけ、それは西日本ではそうなんですよ。関西では、<sup>[I-13]</sup>「へん」っていうのを使いますね。<sup>[I-14][VI-4]</sup>「読まへん」とかね、<sup>[I-15][VI-5]</sup>「書かへん」とか、<sup>[I-16]</sup>「へん」って使いますね。<sup>[I-17]</sup>「へん」っていうのは、<sup>[I-18]</sup>「せぬ」からきていますので、<sup>[I-19][VI-6]</sup>「書きはせぬ」からきてますから、やっぱり「ぬ」なんですよね。広島とか岡山からきてらっしゃる方は普通にね<sup>[I-20][VI-7]</sup>「読まん」とか<sup>[I-21][VI-8]</sup>「書かん」とかいうように「ん」を使いますでしょ。そういうように考えますと、<sup>[IV-1]</sup>文献で<sup>[V-2]</sup>たどっていくとその先に何かあるかという<sup>[I-22]</sup>西日本の<sup>[V-3]</sup>方言に<sup>[V-3]</sup>つながっていくわけです。

(中略)

[2]

たとえば、<sup>[I-23]</sup>いきはる、ですね。敬語の「はる」。<sup>[II-1]</sup><sup>[I-24]</sup>ほんま、ほんまか、とか、ほんまけ。本当っ

て意味ね。<sup>[II-2]</sup> | <sup>[I-25]</sup>えげつないっていうのは、ひどいとかですね。<sup>[II-3]</sup> | <sup>[I-26]</sup>そうでんがな。<sup>[II-4]</sup> | 殺生な、とか。<sup>[II-5]</sup> | <sup>[I-27]</sup>かしわ。かしわって初めて聞いたって人います？鶏肉のことね。<sup>[II-6]</sup> | <sup>[I-28]</sup>そういうこっちや、とかですね。<sup>[II-7]</sup> | 犬が<sup>[I-29]</sup>おる、とか。<sup>[II-8]</sup> | <sup>[I-30]</sup>はよ行こ、とか、<sup>[II-9]</sup> | <sup>[I-31]</sup>こおてきて。買ってきてじゃなくてこおてきて。とかですね。<sup>[II-10]</sup> | <sup>[I-32][VI-9]</sup>受けへん。まあさっき言いましたね。打消しですけども。<sup>[II-11]</sup> | <sup>[I-33]</sup>あかん、いけないですね。<sup>[II-12]</sup> | <sup>[I-34]</sup>雨や。<sup>[II-13]</sup> | <sup>[I-35]</sup>行きまんねん。<sup>[II-14]</sup> | <sup>[I-36]</sup>いちびり。いちびりってわかります？これ結構ね、知らない人多かったね。<sup>[II-15]</sup> | <sup>[I-37]</sup>こいさん。末娘ね。<sup>[III-3]</sup>姉妹がいて、一番下をコイサンと言います。娘のことをね<sup>[I-38]</sup>イトハンといいますね。<sup>[I-39]</sup>コイトハンというのが短くなってコイサン。<sup>[II-16]</sup> | <sup>[I-40]</sup>マムシというのは鰻井。まぶす、からきてますね。<sup>[II-17]</sup> | それから、<sup>[I-41]</sup>めばちこっていうのは、<sup>[I-42]</sup>ものもらいっていう目の病気ですね。<sup>[II-18]</sup> | <sup>[I-43]</sup>やめてんか、っていうのはやめてくれて意味ね。

(中略)

[3]

<sup>[IV-2]</sup>そういう風に考えていきますとね、言葉が広まるというのはどういう風に<sup>[V-4]</sup>広まっていくかという、昔は、よく言われるんですが、<sup>[III-4]</sup>地を這うようにして、隣り合った地域で一方から他方へと言葉が<sup>[V-5]</sup>広まっていくわけです。多くの場合は、<sup>[III-5]</sup>文化の高い地方の言葉が、より低い地方に対して威信があるというか、プレステージが高いという風にも言えますけれども、だから、高いほうから低いほうへと<sup>[V-6]</sup>流れていくわけです。だから、日本全国でいくと、ずっと京都に都がありましたんで、京都から発信して、それが<sup>[III-6]</sup>どんどんどんどん西へ東へと、大体同じ速度で<sup>[V-7]</sup>広まっていくわけですね。そうしますと、ある言葉がずーっと<sup>[V-8]</sup>広まっていくと、<sup>[III-7]</sup>都ではまた新しい言葉ができるんですね、それが輪のように、池に石を投げると波紋が広がりますよね、その波紋のように<sup>[V-9]</sup>広がっていく。日本列島は南北東西に細長いですから、<sup>[IV-3]</sup>一見地理的には離れている東北と、九州沖縄の言葉が同じだったり似ていたりする。そういう現象は、つまり、輪っか状に<sup>[V-10]</sup>広がっていくということがたまたま地理的な条件では離れたところに生じていることがわかる。それは、中央からですね、地を這うように<sup>[V-11]</sup>広まっていった結果であると。これを<sup>[I-44]</sup>「方言周囲論」といいます。